第2章　再現屋、呪いの館の謎に挑む　1

1　電話

オレは文字どおり、驚愕した。
続いて頭の中をパニックの嵐が吹き荒れた。
自分の見ている光景が信じられなかったのだ。
オレの目の前には、想像を絶する化け物がいた。
あるいは、妖怪変化と呼んでもいい。
しかし、いまオレがいるこの場所では、何が起きても、どんな化け物が現れても、これほどふさわしい舞台はないと言っても過言ではないかも知れない。
妖怪変化の正体。じつはオレの知り合いである。ついさっきまでは普通の人間だったのに、いきなり豹変しやがったのだ。女だから女豹（めひょう）と称すべきか、それとも女狐（めぎつね）か？
あまりの変貌ぶりにオレは凍りつかざるを得なかった。
打ち合わせと全然違うじゃないか。
ヘタをすれば、殺されるかもしれないんだぞ。
志乃――。
いったいどんな勝算があるっていうんだ！

そもそもの発端は、オレの元に舞い込んだ一本の仕事だった。
そうなのだ。夢にまで見た東京での成功をあきらめ、泣く泣く生まれ故郷の関西に戻ったオレは、生きていくためにも、新しい仕事を見つけなければならなかった。
告白するが、実家に帰りさえすれば、食う、寝る、の心配はしなくて済むと、頭のどこかでタカをくくっていたらしい。
ところが、広大な実家に君臨する、我が唯一の保護者ともいうべ

き祖父は、あろうことか、おのれの愛すべき孫を、たった一週間で世間の荒波の中へと放り出したのだ。
「働かざる者、生きるべからず」
肉親に対して、あまりに血も涙もない仕打ち。おのが娘でもある我が母親が海外逃亡したのもむべなるかな。
そんなわけで、引っ越しの荷解きをする間もなく、オレは実家を追い出される羽目になった。使ってない部屋なんか腐るほどあるというのに。
もっとも、怠惰な性分のオレのこと、ぬるま湯のような生活に浸っている限り、働こうなんて気は永遠に起きなかっただろう。そんなところまで、きっと祖父はお見通しなのだ。
新しい落ち着き先を、駅前スーパー裏手の安アパートに決めたオレは、当面の生活費を稼ぐため、近所の小さなレンタルビデオ店でバイトを始めた。生きていくのにカツカツの収入だったが、羽振りの良かった芸大生時代の人脈もとうに切れている。贅沢も高望みも言える状況じゃない。ささやかでも、ひとまずは足固めだ。
おっと、最初に言った、事の発端になった仕事というのはバイトとは無関係だ。いや、まったく関係がないとも言えないか。
オレが都落ちした積極的な理由は「映画を作る」ことだった。若い頃からの夢でもある野望を達成するため、東京でのしがらみをすべて脱ぎ捨て、一からやり直すべく故郷に帰ってきたのだ。
だから、店長に頼んで手作りのポスターを店の前に貼らせてもらった。
『あなたのすてきな思い出を再現してみませんか？
経験豊富なスタッフが、脚本から撮影、編集まで、責任を持って製作に当たります。
〝再現屋〟代表　菊地俊郎』
我ながら、ずいぶんと大きく出たものだ。スタッフなんて、オレ

一人しかいないのに。
まあ世間の良識はしっかり機能しているらしい。こんなポスター一枚に、色よい反応などあるわけがない。いかがわしいニオイがプンプンしている。
そしてその自覚は正しかったようだ。旗揚げしたばかりの再現屋への依頼は皆無だった。
オレは、残念そうな顔をしつつ、どこかホッとした気持ちでいたことを告白しよう。根っからの怠惰な性分は、生活の拠点を変えたり、生半可な決心くらいでは覆(くつがえ)らないという証拠だ。
ああ、居心地がいいのは、ぬるま湯にどっぷり浸かる日々……。

「電話ダァーーーーーッ！」
梅雨の真っ最中、雨粒がしとしとと降る午後。
突如、耳元で炸裂したダミ声に、カウンターに肘をついて惰眠をむさぼっていたオレは叩き起こされた。
声の主は、声デカい、顔デカい、態度デカいの笹谷(ささや)店長だ。これで人柄がデカくて気前も良ければ、オレの財布も膨らむのだが、あいにくそううまくはいかない。
まあ、決して悪い人ではないのだが。
「オンナだぁー、菊地、お前のオンナからだぞ！」
送話口をフタすることもなく、大声を発しながら、受話器を捧げるように突き出す。オレはひったくるように受け取ると、ジロジロと注がれる客の視線をかいくぐり、勝手口から表に出た。
「もしもし」
受話器に耳をあてると、色気のカケラもない笑い声が流れ出した。
『トシ、今のがあの、童貞の店長さん？』
「バ、バカヤロー」
唯一の食い扶持を手放させる気か？
「ええニュースやで」志乃は急に声を落とすと、「ビデオ撮影の依頼が来たよ」

2　依頼者

「依頼？　それって仕事なのか？」
ふいに目の前の厚い雲が吹き飛び、天空からまぶしい陽光が燦々（さんさん）と降り注いだような気がした。
溢れる才能を使う場もなく、くすぶり続けていたオレの様子を見かねた神が、ついに救いの手を差し伸べる気になったか。
確信にも似た思いで、受話器を強く握りしめると、
「おい、再現屋の仕事、第一号なんだろ？　な？」
「フッフッフ。喰いついてきましたなぁ。よっぽど退屈してたと見える」
志乃は不遜ともとれる笑い声を響かせた。
うぅ、しまった。素直に反応し過ぎた。これじゃ志乃に図に乗れとお願いするようなもんじゃないか。
思わず舌打ちすると、それも受話器越しに聞こえたらしく、
「まあ、まあ、詳しいことは明日正午、駅前のファミレスで、昼飯おごってくれたら教えるわ。じゃね」
「オイ、他人（ひと）におごるような余裕がオレにあるとでも――」
電話はすでに切れていた。
店内に戻ると、笹谷店長が巨大な顔面に「何の電話だった？」と書いて待っていた。オレはつとめてつまらなそうな表情で、業務連絡ですよと答えると、
「ホンマかー。菊地君のことをトシって呼ぶとこなんぞ、ずいぶん親しげやないかー」
「彼女とは仕事の上の付き合いですから」
「やっぱりカノジョなんやろー？」
「違いますってば」
オレはことさらため息をついて、ひと回り年上の店長の巨体を見上げた。独身であり、未だかつて女性とつきあったことがないと自他共に認めるこの男、良くいえば、世間ズレしてない、真っ直ぐな

心の持ち主なんだが、それゆえに複雑な機微にはとんと疎く、誤った方向に物事を解釈する癖がある。さらに困ったことに、噂話のたぐいは聞くのも話すのも大好きときている。

この界隈の住人は、店長のそんな習癖を知悉していて、聞く時は話半分に受け止め、話す時は慎重の上にも慎重を期す。

それでも騒動になりそうな時は、この店のオーナーでもある彼の父親、すなわち商店街の会長さんの元に御注進に及んだりする。息子に甘い父親は、形ばかりの叱責を我が子に浴びせ、方々に頭を下げてまわることになる。

かくて店長は、ぬるま湯の中ですくすくお育ちになっていく。

「さっきも電話口で『ウチのトシがいつもお世話になってます』と言うてたぞ。カノジョでもないのに、あんな言いかたするかなー」

あのバカ、よけいな話はするなと釘を指しておいたのに。

文字にすると伝わらないだろうが、店長は常に、店の外に聞こえるくらいの大声で喋る。バイトを始めてから、オレの鼓膜はかなり鍛えられたはずだ。

「気のせいです。ほら、お客さんが来ましたよ」

そう言って離れようとすると、店長は餌をおあずけにされた犬のような顔になり、

「それじゃ今度紹介してくれよ。あの色っぽい声の主がどんな人なのか、知りたいなー」

この男、女性客とはろくに話もできない奥手のくせに、興味だけはたっぷりとあるのだ。志乃もそれを知っててイタズラしたのだろう。まったく罪な女だ。明日はとっちめてやる。

明日になった。

約束どおり、正午に駅前のガストに赴くと、志乃はすでに入口で待ち構えており、開口一番「腹減ったぁ」と喚き立てた。

彼女との再会は、祖母の墓参り以来だ。久しぶりに見る志乃は、濃い金色に染め直した長い髪を左右で束ね、白の半袖ブラウスに

オーバーオールという、極めてカジュアルな服装だった。
そう感想を述べると、志乃は途端に眉をひそめて、くるっと背中を向け、
「よぉ見てよ。背中で紐がクロスしてるやろ？　オーバーオールやなくて、サロペットって言うねん」
カワイイやろがーと片足を上げて妙なポーズをとる。
まったく、実年齢と精神年齢との乖離（かいり）は相変わらずだ。
さらには、ベルトだらけの真っ赤なサンダルを解説しようとするので、オレは腕を取ってファミレスの中に引きずり込んだ。

「さあ、仕事について、詳しく教えてもらおうか」
志乃は大盛りライス付きの定食をアッという間に平らげると、おっさんのような仕草で腹を叩いてゲップした。
オレは身を乗り出し、暗い目を向けて催促した。こちらは飯抜きの水だけなのだ。空腹のせいで、いやが上にも気が短くなっている。
「デザート、頼んだらアカン？」
「アカン」
きっぱり断ると、さすがに観念したようで、しぶしぶ説明を始めた。それによると、依頼はメールの形で飛び込んできたのだという。
「先週、再現屋のサイト、立ち上げたやん。見てくれた？」
「見てない。新居はまだネット接続してないんだ」
インターネットや自宅の電話はおろか、携帯電話さえ持てないでいる。バイト収入だけでは、風呂なし共同トイレの家賃だけで精一杯だ。
志乃は自分の携帯をオレの前に置いた。横長のディスプレイに大きく『再現屋．ｃｏｍ』と表示されている。
「まだまだ未完成やけど、再現屋の主旨とか、スタッフの経歴とか、受賞歴のページは作ったよ」
そういや、前に電話で尋ねられたっけ。受賞歴といってもローカルなものばかりで汗顔の至りだ。

「そしたら昨日の朝、メールが来たんよ。ほら」
志乃は小さなボタンを巧みに操作すると、画面が変わって次のような文章が現れた。
『再現屋様　ビデオ作成をお願いしたく、詳細打ち合わせ可能な日時をお知らせください。
綾澤美術館館長　綾澤（あやさわ）なまみ専属マネージャー　隆盛』
依頼先として、志乃の携帯アドレスを公開してるらしい。文章は携帯らしく手短にまとめられていた。
いや、そんなことより――綾澤なまみ、だと？

3　アイドル

「綾澤って、あの綾澤なまみ、か？」
「そう」
志乃はすまし顔で、こっくりと頷いた。
綾澤なまみ。彼女の名を知らない人間は、この国にはいないだろう。デビュー以来、トップアイドルとして第一線を走ってきた彼女は、他に例を見ないその特異な売れかたによって、若者のみならず、年輩の男性女性からも驚異的に支持された。
オレは今一度、メールに目を落とした。
彼女の名前の前に書かれた「綾澤美術館館長」という肩書き。
思い出した。確か二年ほど前だったろうか。我がＮ県南部にある、とある美術館が経営不振で閉館の危機に陥った時、やはりＮ県出身だった綾澤なまみが土地ごと購入し、館長として名を冠することで危地を脱したと聞いたことがある。
メールの送り主は、彼女のマネージャーらしい。隆盛（たかもり）というのか。犬を連れた恰幅のいい和装の男というイメージが心に浮かぶ。
「打ち合わせの日取りやけど、向こうさんは、今度の土曜日が都合ええっていうんで、ＯＫしといたよ」
「ちょっと待った。週末はレンタルビデオの書き入れ時だ。そう簡

単には休めないぞ」
「どアホ！」
志乃は叫ぶと、両手でテーブルをドンと叩いた。両脇の客が驚いて身をすくませる。
「いきなり、何だよ」
「トシにとって、バイト先の事情と、ビデオ撮影の仕事のどっちが大事やのん？」
「そんな……こと、言われなくっても分かってる」
「いやいや、アンタの性格や。安いバイト代でも、生活できるんやったら別にええかなんて、安心してしもたんとちゃう？　それに、いざとなったら実家に泣きつこうなんて考えてへん？」
「シーッ、他人に聞かれるじゃないか。体裁の悪い」
しかし志乃は一切気にせず、ニヤリと笑うと、
「残念でした。アンタのおじいちゃんはすべてお見通し。身内は元より、お文さんにまで『金の無心に来たら問答無用で追い払え』って厳命してはったからね」
「……いやに詳しいな。じいちゃんと会ったのか？」
言うと、志乃は途端に相好を崩した。
「だって、おじいちゃんさー、作り立ての〝天使のプディング〟を好きなだけ食べさせてくれたし、あたしが『家族にも食べさせたいなー』なんて呟いたら、すぐに詰め合わせセットを送ってきてくれはったもん。ええ人やわー」
しっかり買収されてるじゃないか、クソッ。
「オレだって、映画を撮る野望を忘れたわけじゃない。再現屋はその第一歩だ。ただ、あの店長にどう言い訳すればいいか……」
情けない。つい語尾が小声になってしまう。だが、あの大声でネチネチと嫌みを言われるのはたまったもんじゃないんだ。
「それにしても、ホームページ作って、こんなにすぐに反応あるなんて、ツイてると思わへん？」
両手を頭に当て、ニコニコと天井を仰ぐ志乃。合わせてオレも気

持ちを入れ替える。
「まさか再現屋の初仕事が、有名アイドルとは想像もしてなかったよ。でも、どうして無名で実績もないウチに依頼してきたんだろうか？」
「それは何となく分かるわ」志乃は氷の音を鳴らしながらコップの水を飲むと、「理由は〝綾澤なまみ〟やからとちゃう？」
「――そうか」

一六歳でデビューした綾澤なまみは、「貧乏アイドル」というキャッチコピーで一躍世間の耳目を集めた。
そもそも彼女の人生は、捨て子という悲惨な状況からスタートした。施設ではいじめを受け、学校に上がってからも極貧ゆえに制服や文房具を揃えるにも苦労し、放課後は寝る間を惜しんでアルバイトに精を出したという。
そんな彼女が芸能界入りのきっかけになったのは、あるスナックで年齢を偽って働いていた時のことだった。見栄えのいい彼女に、酔った客がむりやり歌わせたところ、予想外の美声に店内の客たちの酔いが一瞬で醒めたという。それからたびたび歌っているところを、今のマネージャーにスカウトされたらしい。
綾澤なまみというのは、芸名だ。
姓は彼女が拾われた場所「綾沢町」から取ったもので、いつか自分を捨てた両親が会いにきてくれることを願って自ら付けたのだ。
下の名は、往年の映画『名もなく貧しく美しく』（高峰秀子主演）のタイトルから。当初は「なま美」としていたが、いつしかファンの間に定着した平仮名オンリーの表記が広まったこともあり、「なまみ」を正式なものとした。
綾澤なまみは、デビューするやアッという間にトップアイドルに登り詰めた。出す曲すべてがミリオンヒット。三ヵ月が過ぎた頃には、テレビで彼女を見ない日はないまでになっていた。
彼女の才能は歌に留まらなかった。ファンサービスで端役出演し

たテレビドラマは高視聴率を叩き出し、すぐさま、彼女主演の映画製作が発表された。その後、映画はシリーズ化され、彼女は映画界でもドル箱スターになったのだった。

もっとも、その中のただの一本もオレは観たことがないけれど。

『私はずっと貧乏な生活を送ってきたので、お金の使い方がよく分かりません。お金を持っていることが不安でさえあります。他の皆さんのように、好きな服を買ったり、貯金したりということがどうしてもできないのです。

いつも応援してくださる皆さんのおかげで、私のCDやライブDVDをたくさん世に出すことができ、お金もたくさんいただきました。でもそんな大金を私ひとりが持っていてもしかたがありません。だから、すべて皆さんに還元させていただこうと思います』

ファーストコンサートツアーの最終日、綾澤なまみは武道館のステージで、こんなメッセージを発表した。

そして宣言どおり、収益のほぼ全額を、孤児たちの施設や、地震や台風などによる被災者、交通事故死者の遺族など「困っている人たち」に寄付したのだ。

以後、綾澤なまみは貧乏アイドルとして、今日まで絶大な人気を博し続けている。もちろんテレビ番組やファンの間ではそんな言葉は使わない。最近の時流に乗って「エコアイドル」というんだそうだ。

事実、彼女は衣装を三着しか持っていないらしい。住む場所も、所属プロダクション社長自宅の離れを間借りしているという。

以前、バラエティ番組に出演した時、ある芸人がからかい半分に貧乏合戦を挑んだところ、カップ麺の味の違いや、さらに美味しく食べる方法などを微細に渡って披露され、芸人は負けを認めざるを得なかったとか。

「デビューして今年で五年やねんて。五周年記念のコンサートが九月から始まるらしいわ」

以上の話は、オレの記憶一割に、芸能通の志乃による解説九割をまとめたものだ。
天下のアイドル綾澤なまみが、どうして無名のウチなんかに仕事を依頼してきたのか？
理由は「料金」以外、考えられない。
「急遽、ビデオを作らなあかんらしいんやけど、大口の寄付をしたばっかりで、大した予算を捻出でけへんらしいわ」
「そりゃ、がっかりだな」
一瞬、借家住まいから解放される夢を見たのに。
「ええやん。これで立派な仕事ができたら、最高の宣伝になるし」
もっともだ。そうなってもらわないと困る。
「しかしなあ、アイドルのイメージビデオなんて、型にはまったようなモンだろうが」
あえてエラそうな口振りで愚痴ってみる。すると志乃は首をプルプルと振り、
「どうも、そんなんやないみたい。メールでは、とにかく美術館に来てほしいの一点張りでね」
「綾澤美術館か――」
その時のオレたちは、美術館で身も凍るような恐怖体験をすることになるとは、想像すらもしていなかった。

4　マネージャー

週末が来た。
オレは駅のホームで志乃と待ち合わせると、ガタンゴトンと私鉄電車に揺られて、県南部の山間部へと向かった。
目指すY駅までは一時間半。途中で二度乗り換えるが、川沿いに走る最後のローカル線になると、周囲は山だらけになった。
数日前に梅雨入り宣言が発表され、昨日まで雨が降り続いていたが、今朝は久しぶりの陽射しが戻ってきた。車窓から眺められる緑

も、目に痛いほど青々としている。
Ｙ駅に到着。好天の週末ということで、降りた客はオレたち以外にも結構いた。春は桜の名所として知られるが、四季を通して自然の移り変わりに接することができるので、人出が絶えることはまずないと聞く。
肩に下げたバッグに入っているのはノートとビデオカメラ。今日は打ち合わせだけの予定だが、できればロケハンを試みたい。ついでに綾澤なまみを撮ることができたら……。
オレはこの日、朝から柄にもなく気持ちが高ぶっていたことを白状せねばなるまい。
あの綾澤なまみと、ナマで会えるのだ。
健全な男子なら平常心でいることは難しかろう。思い入れの特にないオレでさえそうなのだ。バイトを休む理由を話したときの、笹谷店長の顔といったらなかった。ついていくと駄々をこねるのを押しとどめ、棚にあった綾澤なまみのＤＶＤを借りて帰ると、昨夜までかかって全巻制覇した。
歌のうまさは定評どおりで、ライブ公演は感動的でさえあった。逆に映画のほうは、お世辞にも出来がいいとは言い難く、彼女の演技も素人の域を脱してはいなかった。それでも彼女の可愛らしさをフィルムに定着させるのには成功しており、ファンにとっては、綾澤なまみのイメージビデオとしては十二分に価値があるだろう。

「お迎えの人やろか」
志乃が指差す方向に、オレたちと同年輩と思しき男性が立っていた。くたびれの目立つグレーのスーツに包んでいるものの、有名な砲丸投げ選手のように屈強な体格ははちきれんばかりだ。
「タカモリさんですか？」
訊ねると、無骨な顔の男性は、鋭い眼光をこちらに向け、深々と頭を垂れた。
「初めまして。リュウ・シゲルと申します」

あちゃーっ、やっちまった。「隆盛」はフルネームだったのか！
「島津志乃様、菊地俊郎様ですね？」
問いかけられて、オレはおろおろと頭を下げた。
隆氏はズンズンと迫ってくる。殴られるんじゃないかとヒヤヒヤしていると、彼は腰を前に折り曲げて、
「本来なら、綾澤自らお出迎えすべきところ、混乱を起こしてご迷惑をおかけすることを怖れ、私だけでこうして参りました。美術館ではお二人の歓迎の支度が整っております。どうぞお乗り下さい」
「ありがとう」
そう応じて、スッと前に出たのは志乃だ。隆氏に対してにっこりと微笑む。
すると、アレレ。どうしたことか、隆氏のむくつけき顔が一気に真っ赤に染まった。彼はあわてて視線を志乃から逸らすと、扉を開こうと車のドアノブに手を伸ばした。ところがその手をドアにブチ当て、突き指してしまった。
「ア痛ッ」
短く叫んだ隆氏は、反動でのけ反り、右脚に左脚を絡ませてしまい、そのまま地面にドウッと倒れた。
「大丈夫ですかー」
志乃が駆け寄り、手を差し伸べると、隆氏はさらに恐慌を来した。アララララッと意味不明な声を上げると、尻を地面についたまま、後じさりした。
どうやら隆氏、極端なまでに美人に弱いらしい。
オレが志乃の前に出ると、むしゃぶりつくようにすがりついてきた。
「あの、どうも、あの、失礼しました、失礼しました」
ハンドルを握った隆氏はどうにか平静を取り戻したらしく、オレたちを乗せて、木々に囲まれた舗装路を快走していく。
事故でも起こされたらたまらないので、志乃は後部座席に乗せ、

注意が向かないよう、助手席から始終話しかけていなくてはならなかった。じつに面倒くさい。

「今日と明日は閉館しております。再現屋さんに、じっくり観ていただきたいので」

「所蔵している作品は、昭和の日本人画家によるものが主で、このN県出身の作家ばかりです」

「駅からバスで二十分という立地のせいでしょうか。買い取った頃は話題にもなり、少しは客足も伸びましたが、その後は減る一方です」

オレの問いかけに、隆氏はいちいち丁寧に答えてくれる。第一印象に比べて、意外に神経が細やかで誠実そうだ。オレはあらためて好感を持った。

ただ、時折チラチラとバックミラーで志乃を見るのはやめてほしい。そのたびにハンドルがブレるのだ。まあそれも、志乃がベラベラと喋り出すまでだろうが。

車は砂利道を踏みしめ、大きな門の前で停車した。

オレはフロントガラス越しの眺めに、思わず息を飲んだ。

何だこれは？

こんな美術館は見たことがないぞ。

5　美術館到着

木々に囲まれた丘の上にうずくまる巨獣。

それがオレの第一印象だった。

獣の背中には無数の針が揺らめいており、強烈な陽の光を浴びた入道雲を背景に、黒々と浮かび上がった奇怪なそれは、さながらハリネズミの化け物のようだった。

呆然と眺めているうちに鉄柵の門が開いた。車はゆっくりと中に入ると、ハリネズミの鼻面（はなづら）を見上げるような場所に停車した。

「到着です。お疲れさまでした」
隆盛にうながされて、オレたちは車を降りた。
そこは駐車場だった。他にも数台のセダン車があった。
もう一度、視線をハリネズミに向ける。それは怪物などではなく、巨大な建築物だった。綾澤美術館の本館であることは疑いようがなかった。
撮れるものは撮れる時に撮っておけ。大学時代の恩師の名言である。
オレはすかさずバッグからビデオカメラを取り出し、スイッチをオンにして構えた。ハリネズミの鼻面がファインダーいっぱいに映し出された。
建物の外郭をなぞりながら、レンズの向きを変えていく。
美術館は、なだらかな丘の陽当たりの良い南側に鎮座しており、入口から丘を登るように奥へと続いている。その低い頂上の辺りに、展望台らしきものがあり、ガラスが陽光を反射していた。
これだけなら、ちょっと風変わりな美術館といえるだろう。だが、屋根の上でワサワサと蠢(うごめ)いているアレはいったい何なんだ？
「何なんや？　キミは」
突然、肩越しにケンのある声が飛んできた。振り向くと、てらてらと光る頭が、人差し指をオレに突きつけながらズンズンと迫ってくる。
「キミ、美術館では撮影禁止やっちゅうのを知らんのか？　知らんのか？　知らんのか！」
指先がレンズに触れる直前でオレはカメラを逸らした。そういうおっさんこそ何者だ？　太い両眉の下でどんぐりマナコが，オレを吸い込まんばかりの眼ヂカラでキッと睨んでいた。
「町長！」禿頭の後ろから線の細い男が駆け寄ってきた。「撮影不許可は建物の内部だけです。落ち着いてください」
「落ち着けぇ？　このワシが怒鳴らんよーになったら、おしまいやぞ、おしまいやぞ！　それでのーても、最近は妙な連中がウロウロ

しとんのに」
細い男はまあまあとなだめながら、ペコリとこちらに頭を下げると、腕をぶんぶん振り回す男の背中を押して、美術館エントランスへと消えた。
「のっけから、濃いキャラの登場やね」
隣りで志乃が肩をすくめる。
「こちらです。どうぞ」
隆盛がエントランスを手で示しながら、オレたちを先導した。
「先が思いやられるな」
「オモロなりそうやん」
志乃はクククっと笑った。懲りずにオレは、カメラをしっかりと建物に向けながら、隆盛のあとに従った。

外見とは裏腹に、中は真っ当な美術館だった。
ロビーに入ると、そのまま受付の横を通り過ぎ、『大会議室』と札の出ている部屋へとオレたちは案内された。
程よく冷房の効いた会議室には、先ほど町長と呼ばれた男と彼の部下が着席していた。オレは目を合わさないように、距離をとって同じ並びに腰掛けた。
隆盛は、しばらくお待ち下さいと言うと、すぐに出ていった。
会議室は「大」が付いているわりには狭かった。オレは息苦しさと町長に対する気まずさから、ただ座って待っている気になれず、窓の景色でも眺めようと立ち上がった。
ブラインドの隙間から見える窓には、若干黒っぽいガラスが嵌め込まれていた。おそらく熱線や紫外線をカットする特殊ガラスなのだろう。こんなところにもエコの片鱗がうかがえる。さすがエコアイドルが館長なだけある。
ノックの音がして、女性事務員が入ってきた。どうぞと声をかけながら、冷えた麦茶の入ったコップを置いていく。オレはおざなりに礼を述べ、コップの中身を乾ききった喉に流し込んだ。ウマい。

生き返る心地がする。
「アレレ？　ひょっとして」
そばで志乃が素っ頓狂な声をあげた。何ごとかと振り向くと、彼女は事務員を指さしていた。
「アナタ、綾澤さんとちゃうの？」
ナニッ。
オレは驚いて事務員の顔を正面から見つめた。
「そ……そうです。……あの、初めまして」

6　アイドル登場

国民的アイドルの綾澤なまみ。
彼女が目の前にいる。これは現実か？
綾澤なまみはコップの載った盆を両手で捧げたまま、呆然と立ち尽くしている。前髪が垂れているので表情は読み取れないが、彼女に気づいた志乃の言葉に驚いて、大いに戸惑っているようにも見受けられる。あるいは服装のせいで気づかれないと思っていたのかもしれない。
しかし戸惑うのは一般庶民のこちらのほうだ。
オレは何と挨拶していいか分からず、開きかけた口をアワアワと動かしていると、志乃はあろうことか彼女の両肩を鷲掴みにし、
「ホンマもんの綾澤なまみやんねー？　めっさウレシー！　テレビで見るよりカワイイやん。スタイルもええねー」
そんなことを言いつつ、上から下へと舐めるように視線を動かす。
「オイ、失礼だろ」
たまらず背中を小突くと、さすがの志乃も、
「おっとっと、あたし調子に乗り過ぎ？」と言って舌を出し、「ごめんなー」と綾澤なまみに対して、へらへらと笑ってみせた。
「タメ口はやめろ。こちらはオレたちのクライアント様なんだぞ」
しかもＶＩＰの有名芸能人だ。粗相があっては、今後のオレたち

の仕事にも差し支えるかもしれない。
「いえ、いいんです。……ファンの皆様に喜んでもらうことが、アイドルとしての務めですから」
綾澤なまみはそう言うと、深々と頭を下げ、そして初めてオレに顔を向けてくれた。
カ……カワイイ。
身長は１５５くらいか。濡れ羽色のロングヘアーを後ろで束ね、くっきりとした二重まぶたの大きな眼は憂いを秘め、通った鼻筋と形のいい唇が誘惑するように迫ってくる――。
いや迫ってくると感じたのは、オレのうぬぼれだ。願望だ。
実際の彼女は申し訳なさそうに眉を下げると、
「あのお……お二人が再現屋さんなんですね？」
オレは逸る心のままに、志乃の前に強引に出た。
「そ、そうです。私が制作担当の菊地俊郎です。で、こっちが、ええっと、プロデューサーの――」
「島津志乃でーす。メールいただき、ありがとうございまーす」
「いえいえ、こちらこそこんな田舎まで来ていただいて」
「田舎の町長にも紹介してもらえまへんか」
横から声が割り込んできた。禿頭のおっさんである。
「これは町長さん、御無沙汰しております。お元気でしたか」
「ハッハッハ。アンタにお会いすることが元気の素ですわ。できれば毎日でもお会いしたいくらいや。毎日でもな」
綾澤なまみは、あらためてオレたちを町長に紹介した。
「ほう、映像屋さんでっか」
今日の志乃は、ダークグレーのスーツでキメている。町長らを前にしても恥ずかしくない出で立ちだ。昨夜さんざんＴＰＯを言い含めておいたのが効いた。当然オレも一張羅のスーツに久しぶりに手足を通した。
「再現屋と名乗らせてもらってます」と如才なく言い添える。
「その映像屋さんが」町長はオレを無視して続ける。「ここでアン

タのイメージビデオとかを撮りはるんでっかいな？　それやったら大賛成や。美術館の宣伝にもなるし」
「いえ、そうではないんです」綾澤なまみは少し言い淀むと、「後ほど説明させていただきますので、ひとまずご着席ください」
促されてオレたちは元の席に腰をおろした。綾澤なまみは一礼して退出すると、両腕にプロジェクタらしきものを抱えて戻ってきた。その後ろから、マネージャーの隆盛が回転巻込み式のスクリーンと持って現れた。
「他に職員、おれへんみたいやね」
綾澤なまみたちは机を寄せたり、プロジェクタのスイッチを入れたり、てきぱきと会合の準備を進めていく。やがてセッティングが完了したらしく、隆盛は脇に下がり、綾澤なまみは壁の時計をちらと見て――時刻は午後三時を指していた――から、スクリーンの前でお辞儀した。
「皆様には、あの、お忙しい中をお集まりいただき、心より感謝申し上げます。……まだ到着していないかたもおられますが、時間が来ましたので……始めさせていただきます。本日は……私ども以外の職員はおりませんので……その、何かと不都合をおかけするとは思いますが……どうかお許しください」
ＤＶＤで見た彼女は、ステージの上を軽やかに駆け回り、最初から最後まで笑顔を絶やさず、徹底的にファンサービスに努める、天性のアイドルだった。
同じ人物が、いま目の前で笑顔もなく、ぎこちない喋り方で語っている。緊張感すら漂わせて。
腑に落ちないな。
もちろん、アイドルとはいえ一人の人間であるから、常に芸能人としてのテンションで振る舞っていられるわけじゃなかろう。それにしても、彼女の目線の落ち着きのなさ、顔色の蒼さは奇妙だ。まるで――そう、まるで不祥事に対する釈明会見を見ているような。
「さて、本日お越しいただいた件についてですが……ああ」

綾澤なまみは言葉を途切らせると、突然膝が砕けたようにバランスを崩した。
考えるより先に椅子を蹴っていた。だが隆盛のほうが同じテーブルにいた分、利があり、オレは彼の肩に弾かれ、部屋の隅っこまで転がっていった。ゴンという激突音とともに目の中に火花が散った。
「何をするの！」
悲鳴のような綾澤なまみの声が響いた。続いてパタパタと近づくスリッパの足音。そして持ち上がるオレの頭と後頭部に感じる手の平の温もり。
瞼を開くと、とんでもない近距離に、アイドルの顔のドアップが。
「ごめんなさい。乱暴なことをさせて」
死んでもいい。本気で思った。
トップアイドルが、オレを気遣ってくれている。
はかなげな眼差しが、いまオレだけに注がれている！
「――可憐だ」
つい、某有名アニメ映画のセリフを吐いてしまった。宮崎監督ゴメンナサイ。
「立てますか？」
泣くような声で優しく問いかけてくれる。おまけにいいにおいも。あっ、垂れた前髪がオレの額に――。
身体が浮いた。えっ？
よく見ると、オレを抱きかかえているのは隆盛だった。ウソッ。どの時点で入れ替わったんだ？　あの前髪の感触はどっちの――。
アイドルは向こうで志乃に対して詫び言を繰り返していた。志乃は、おじいちゃんも匙（さじ）を投げるほどのアホやから、これ以上頭はワルならんよ、などとほざいている。
「降ろせ、降ろしてくれ」
「本当に大丈夫ですか？　血は出ていないようですが」
オレは隆盛の両腕の中から抜け出した。これ以上カッコワルいところを見せられるかってんだ。

すみませんでしたと謝罪する隆盛を尻目に席に戻る。綾澤なまみの視線に対しては、全身をセンサーと化す。オレはすっかり彼女のトリコになってしまったようだ。
「アホたれ」
志乃に後頭部をハタかれる。
「イテッ。何すんだ」
「慣れんことはせんとき。アンタは俳優やのーて、あくまでスタッフなんやから」
知ってるわい。血も涙もなければ情けも機微もない言葉だ。綾澤なまみの爪の垢でも煎じて飲め。あ、そんなのがあったらオレが飲みたいかも。

ドタバタがあったが、全員が元の席に着き、綾澤なまみは、自分が貧血気味に加えて寝不足であることを明かした。
日を変えてもええよと志乃は提案したが、綾澤なまみは首を振り、
「急いでお話ししたいことがありますので」
と気になることを言った。
本題に入る前に、彼女は出席者を正式に紹介した。
禿頭の男は、Y町町長の田辺哲（たなべてつ）。
付き添っているのは町議の飯山喜三郎（いいやまきさぶろう）。
ブルドッグのような面構えでオレの首くらいの背丈の町長と、派手な顔作りで四十台前半と思われる町議。二人並べると悪徳金貸しとその秘書といった印象である。
「そちらはなかなかの別嬪さんだが、女優さんか何かかね？」
町長、セクハラまがいの言葉を吐きやがる。しかし志乃は気にする様子もなく、ありがとうございますと笑顔を返し、
「今は映像制作のスタッフですが、以前は東京で舞台女優もやっておりましたのよ。ホホホホホ」
「お名前は聞いたことがないけどな」
「役者さんの数は町長さんより多いですからね」

冷や汗が出る。
その時、「女優……」というつぶやきがかすかに聞こえた。顔を上げると、綾澤なまみと視線がぶつかった。
「あ、いえ、本物の女優さんなんだなーって思って……えー、それで今回、再現屋さんにお願いしたいと思っていますのは」
いよいよ本題の本題。核心である。
綾澤なまみのプロモーションクリップでないことはさっき聞いた。となると、美術館の広報ビデオだろうか。
「――幽霊です」

7　美術館の受難

綾澤なまみは、うつむいたまま小声でつぶやいた。
幽霊？　なんだそりゃ。話がいきなり茶番めいてきたぞ。
と、その時。
ブラインドの間から漏れ差す光が一瞬きらめき、続いてゴロゴロという遠雷の音が鳴り響いた。
オレはビクッと身体を強張らせた。
よりによって、こんな時に――！
「幽霊って？」
志乃が隣りで問い返している。こちらの異変には気づいていない。
オレは顔を伏せ、見えないようにして額の汗を拭った。
会話は続いている。
「出るの？　ココ」
「……はい」
なまみの返答は落雷となってオレをぶちのめした。膝から力が抜けて、椅子から滑り落ちそうになる。
「どないしたん？」さすがの志乃も不審に思ったらしい。「まさか、幽霊が恐いとか言うんやないやろね」
「違う」カラカラに乾いた喉を振り絞って答える。「雷だ」

「カミナリぃーっ？」
あわてて志乃の口を手で塞ぐ。しかし会議はオレたちのやりとりに関係なく進んでいた。
「まだ、そんなことを言うとるんですか、綾澤さん」
田辺町長だ。うんざりしたニュアンスが含まれている。
「町長さん、でも――」
「あんな連中の言うことをいちいち真に受けとったら、いくらアンタでも笑われますよ」
なまみをアンタ呼ばわりする。ファンが聞いたら袋叩きに遭いかねないぞ。
「でも――」
「それでのーても、この美術館の入館者数は減る一方なんや。アンタに館長としての責任感がちらーっとでもあったら、つまらん噂に振り回されてる暇はないはずやけどな」
ねちっこい言葉が続く。
オレは汗ばむ額に手を当てて、状況に集中した。どうやらここでは幽霊騒ぎが起きているらしい。
「今日初めてお越しの再現屋さんは、まだ事情をご存じないので、私からかいつまんで経緯をご説明します」
隆盛がそう言って前に出たので、オレたちはようやく事態を把握することができた。
〝幽霊〟が目撃され始めたのは、今から二ヵ月ほど前。二階の窓の外を人影が通り過ぎた。誰もいない展示室でうめき声がして、探してみると濡れた足跡が床を点々と這っていた。そんなことがたびたび起こったが、誰もまともに受け合おうとはしなかった。
ところが先週、老人ホームの団体を迎えた時、一大事が発生した。ご婦人たちが、彫像が動いたと騒ぎ、一人が心臓発作で倒れたのだ。
後で調べても彫像に不審な点はなかったが、以来、客足はめっきり遠のいてしまい、たまにやってくるのは、ホラーマニアのカメラ小僧だったり、お祓いをしようという怪しい連中ばかりとのこと。

「じつは、私も見ました」
隆盛が遭遇したのは、奇怪な声を張り上げて飛び過ぎる怪鳥だった。ひとりで廊下を歩いている時に現れ、あわてて屋上に出てみると、黒い影が森の上を飛び去っていったという。
「……あの、私も」
今度はなまみが口を開いた。彼女が出くわしたのは、ちょうど展示室で町長の奥方のグループを案内してまわっていた時だった。なまみは普段、表に出ることはないが、特別な場合だけ乞われて案内することになっていた。
「怖かったです……いま思い出しても」
突然、窓が割れて、いくつもの石くれが展示室に投げ込まれたという。奥方らは悲鳴を上げて逃げ惑ったが、なまみが逸早く避難誘導したので事なきを得た。しかしなまみ自身は脇腹に直撃を受け、今も痣(あざ)が残っているという。かわいそうに。
「それも幽霊の仕業やったん？」
志乃の質問に、隆盛は不明ですと首を振った。
「ただ、石の中にはサッカーボール大のものも混じっていて、とうてい人間に投げられるとは――」
「警察には？」
オレが訊ねると、意外にも答えたのは町長だった。
「ワシが通報せんように命じた。考えてもみい。これ以上騒ぎを大きゅーして、化け物美術館みたいな噂が広まったらどないする？Y町の観光資源の目玉としては、大痛手やわい」
「しかし、犯人が人間の可能性も」
食い下がると、町長はひらひらと手を振り、
「どっちゃでもええ。町の予算からなけなしの金をひねりだして、建物のあっちゃこっちゃに監視カメラ取り付けたさかい、犯人も二度とやろうとはせんやろ。人間にしろ幽霊にしろな」
「カメラの半数は、ダミーのニセモノですが」
隆盛が補足すると、町長は怒りの形相をあらわにして、こぶしで

テーブルをドンと叩いた。
「アホタレ！　部外者にバラしてどないすんねん！」
するとまるでそれが合図でもあったかのように、激しい雨音が会議室を囲んだ。雷鳴はあれっきりである。安心していいのか。
「部外者では……ありません」
取りなしてくれたのは、綾澤なまみだった。オレは眼をハートにして見上げると、彼女は美しい仕草でうなずき、毅然とした表情を町長に向けた。
「このかたがたは私を……いえ、美術館を救いに来てくださったのです」

8　混乱

なまみが、いや、なまみさんが言い放った途端、外の雨がまた一段と激しさを増した。
それは観客の惜しみない拍手にも聞こえた。コンサートのクライマックスを彷彿とさせた。
もちろんオレの勝手な思い入れだけど。
しかし、少なくともオレは、テーブルの下で小さな拍手を送っていた。
「再現屋さんには、是非」なまみは続ける。「幽霊をカメラで捉えていただきたいのです」
――何だって？
オレは叩いていた手を止めた。
なまみの言葉は耳の穴をくぐると、意味のない文字を脳味噌に型押しして、そのまま外に出ていった。
幽霊を・カメラで・捉えてほしい。
幽霊を。
カメラで。
捉えてほしい。

何なんだ、これは。切っても並べても、飲み込めない。
幽霊が、本当に出るのか？　ここ。
考えるのもバカバカしいが、なまみさんの顔は笑っていない。
幽霊を撮影してくれというのが、それが依頼――なのか本当に？
だいいち、出たとしても幽霊はビデオカメラに映るのか？
いや待て、心霊写真というのは存在する。なら映ってもおかしくないか。
待て待て。すでに幽霊の存在を肯定して、考えを進めていないか、オレは。心霊写真などインチキだろう。白い煙や揺れるカーテンを見誤ったり、恐怖心がないものあるように錯覚したりしているに過ぎないんじゃないか。
そんな人類史上、いまだ実証されてないモノを、撮影しろという。まともな人間なら、顔を真っ赤にして席を立つんじゃないか。帰ってしまうんじゃないか？
横顔に熱波を感じた。
振り向くと、田辺町長がゆでダコ、じゃない、ゆでブルドッグのごとき真っ赤な形相で（本当にブルドッグをゆでたら各方面からクレームが来るが）立ち上がっていた。その太い指先が真っ直ぐなまみさんに突きつけられている。
やっぱり怒ってる。この人なら分からないでもない。幽霊やＵＦＯなんて単語とは対極にいる人物だ。酒の席でも口にしたことはないだろう。
ブルドッグの口がわななきながら開いた。
まさに新たな火種がダイナマイトに引火しようとした瞬間、
「受けたっ！　その依頼」
志乃が雷に負けない大声で空気を割った。
彼女は左右のこぶしを握りしめたまま、テーブルの間をスタスタと抜けると、両腕できつくなまみさんを抱きしめた。
……羨ましい！
なまみさんは呆気にとられて眼を左右に動かすばかりだ。マネー

ジャーの隆盛は、同性なら安心と踏んだのか、オレのように志乃を突き飛ばしはしなかった。
しかし、このまま治まりそうにないのが町長だ。伸ばした指先を丸めると、肩の高さで振り回しながら、
「こ、この世間知らずの小娘が！　我が町がどれだけの補助金を出したのか忘れたんか！　そもそも、子供のお遊びか、タレントの人気取りかは知らんが、ワシらの大切な文化施設を奪うような、人の足許を見る真似しくさって。恥ずかしーとは思わへんのか」
「町長」飯山町議が町長の腕をつかんだ。「言い過ぎですよ。それじゃ喧嘩です」
「引っ込んどれ、この穀潰しが！」
吐き捨てるように言って、腕を振りほどいた。はずみで飯山はバランスを失ってテーブルの角で尻を打ち、うわわと叫びながら床に転がった。「お父さん！」
ン？　今チラッと言わなかったか？　お父さん？
すると、この町議は町長の息子か、それとも娘の旦那？
「アホらしゅーて、つきおうてられるか」
町長は椅子を蹴ると、床を踏み破らんばかりの足取りで出口に向かった。待ってくださいと、なまみさんが追いかけるが、町長は聞く耳を持たない。飯山も泣きそうな顔で後を追う。
もはや会合はおしまいだ。グダグダだ。
町長はエントランスに向かいつつ、なお毒舌を吐き続けていた。時間の無駄だっただの、そんなに好きなら幽霊博物館にしてしまえだの。
全員が引きずられるように、自動ドアの前までやってきた。二重になっているガラスドアの向こうは、一寸先も見えない土砂降りだった。辺りは昼下がりというのに夕暮れのような暗さだ。
「しばらく待たれたほうが」
「やかましーっ。ワシは忙しいんや！」
ヘソを曲げたおエラいさんほど、始末に負えないものはない。飯

山に傘を出せと怒鳴りつける。飯山は飯山で会議室に忘れましたと廊下を駆け戻っていく。その背中に毒つく町長。
いっそ、いないほうが話はスムーズに運ぶんじゃないかと思うものの、なまみさんは町長の腕をつかんで、必死に説得を試みている。
「――正体がハッキリすれば、噂も消えますから」
戻ってきた飯山も口を添える。
「――決裂すれば、我が町にとって大きな損失ですよ」
どうやら事情は簡単ではないらしい。
しかし完全にキレた町長は、濡れても帰るぞの一点張りだ。内側のドアを開くと、後ろも振り向かずに進んでいく。
外側のドアが開いた。ひどい湿気とともに強い風雨が吹き付け、皆を奥へと押し返した。
「無理です、町長」と飯山。
「こんくらいの雨で音を上げとったら、Y町には住めんワ！」
あくまで我を張る田辺町長。
と、その時。
またもや悪魔の鉄槌が振り下ろされた。
暗いエントランスが、一瞬、二瞬と、昼間のように真っ白になり、ほぼ同時に、地面を揺るがす恐怖のサウンドが。
ドーンッ、ズズズーンッ。
落ちた！　すぐ玄関先だ！
全身から一気に力が抜ける。膝が砕ける。尻が床に落ちる。気づくと涙が出ていた。つるつるの床の上を逃げようとする手がひたすら掻きむしる。
なんでオレはこんなに雷に弱いんだ。
ゴツンと後頭部に衝撃。内側のガラスドアに衝突したのだ。頭を押さえてうずくまるオレ。じつに情けない。
「おやおや、大勢でのお出迎え、感謝致します」
ふいに聞き慣れない声が耳に飛び込んで来た。まぶたを開くと、エントランスのひさしの下に立つ、黒い影が見えた。

9　キュレーター

新たな登場人物の印象を一口で言えば、雷の神だった。
カミナリのカミ。音声にすると、舌をカミそうだ。
素直に雷神（らいじん）と表現すればいいのかもしれないが、そうすると、角を生やして、緑色の裸体を風に晒（さら）しながら、縦横無尽に空を駆け巡る妖怪めいたものをイメージしてしまう。
しかし、雷とともに突然現れた長身の男は、そんなイメージとは程遠い、人間だった。それでも雷神を連想させたのは、男の髪だった。落雷による電気を吸収したのか、ウニのように逆立っていた。帯電しやすい体質なのかも知れない。それも急速に収まっていった。
いずれにせよ、彼の出で立ちは、どこか人知を超えたものを感じさせた。
長髪を吹き込む強風になびかせ、白のスーツで身を固めた細身のシルエットや、眼鏡の奥のきりりとした二枚目の顔立ちは、漫画やアニメに登場する王子様系だ。
都会なら日に四、五人はすれ違いそうな外見だが、見た者をぎょっとさせる点が一カ所だけあった。
彼の髪は銀色だったのである。ただのグレーではない。光っているのだ。
「なまみさん、お待たせして申し訳ない」
彼はそう言うと、なまみさんの手を取って、銀色の頭を下げた。
「いえいえ、こんな悪天候の中、よく来てくださいました」
なまみさんは心なしか、どぎまぎしているようにも見えた。男は微笑みながら、今にもなまみさんを抱きしめかねない雰囲気を醸し出していた。
オレは冷静に観察していたわけじゃない。
いったい誰なんだ、この馴れ馴れしい野郎は！
ガラスドアの脇では、田辺町長も飯山議員も口をポカンと開けて

いる。二人も新参男の正体を知らないらしい。
あわてて、なまみさんは男を皆に紹介した。
「こちらは、ジャン＝フランソワ・加東さん。フリーでキュレーターをされているんです。お知恵を貸してくださいとお電話しましたら、わざわざここまで来てくださったのです」
「ジャンとお呼び下さい。こう見えても、れっきとした日本人ですから」
どう見えると思っているのだろう。彼は丁寧過ぎるほど腰を折って、深々とお辞儀した。
オレの背中を志乃が突っつく。
「キュレーターって何？」
「知らないのか……オレもよくは知らん」
何でも欲しがる、キュ～レキュレタコラ～。
そんな替え歌が浮かんだが、もちろん歌ったりはしない。
「キュレーターは、美術館における学芸員のようなもの、とお考えください」
加東は眼鏡の位置を直しながら、オレの肩越しに志乃に答えた。
あ、どもっと志乃。
「町長さん」なまみさんが胸に手を当てて呼吸を整える仕草をしながら呼びかけた。「こんな嵐の中を、車で走られるのは大変危険です。どうか風雨が静まるまで中でお待ちください」
町長は加東の登場に気を抜かれたようだが、やっとのことで我に返ると、顔をしかめ、
「いやワシは――」
「ここに来る途中」加東が外を指さした。「私の車は、Y川の橋を渡ったのですが、川の水は氾濫寸然でしたよ。しかも渡り終えた途端、通行禁止になりましてね」
この美術館までは、橋から一本道だ。町まで降りるのに、他に抜けられる道はどこにもないはずだ。
ということは、ひょっとして。

「町長！」飯山が叫んだ。耳に携帯電話をあてている。「地元警察に問い合わせてみました。確かに通行禁止になっています。しかも、橋とここをつなぐ道の両脇の崖が土砂崩れを起こして、そちらも通行止めになっているそうです」

会議室の並びに、ゆったりとした応接室があり、ひとまずは全員そちらに落ち着くことになった。

町長は口を真一文字に結んだまま、荒々しくソファに腰を落とした。飯山は少し距離を置いて同じソファに座っている。

加東も秘書を帯同していた。派手な加東に比べて、西と名乗った秘書は、どこといって特徴のない丸顔の小男だった。挨拶でも名前を告げただけで、無駄口は叩かないという顔つきをしている。年齢は三十歳くらいか。

逆に、加東は何歳なんだろう。三十前半にも四十代半ばにも見えるから不思議な男だ。

不思議といえば、駐車場からずぶ濡れになってトランク類を運び込んだ西に対して、加東はエントランスに現れた時、白いスーツには一滴のシミもなかった。

「ダメです。電話が通じなくなりました。携帯も含めて」

隆盛がため息をつきながら室内に入ってきた。

田辺町長は、どうにかならんのかとイラつきを隠さず怒鳴り散らしている。隆盛も飯山もハアと生返事しか出てこない。

時刻は午後七時。

ひとまずくつろぐようにと、なまみさんと隆盛がアイスコーヒーとクッキーをサーブしてまわる。応接室は窓がないせいか、雷鳴はほとんど聞こえてこない。

オレは全身から強張りが解けていくのを感じていた。

雷に弱いのは、物心ついてからずっとだ。

東京でアニメスタジオの間を走り回っている時も、ピカッと空が光ると、車を止めて運転席の中でブルブル震えていた。苦手なもの

は、一生変わらないものなのだろう。
加東の秘書の西がシャワールームから戻ってきた。なまみさんがそうしろと勧めたからだが、最初は固辞していた西も、加東の「御好意を無にするな」のひと言で折れた。
そう、ここは宿泊施設が完備してあるのだ。誰も口に出さないが、このまま天候が回復しなければ、綾澤美術館に一泊ということになりそうだ。
「マイッタなー」
オレじゃなくて、志乃である。
「どうした。着替えの心配か？」
「それもあるけど、今夜、見たいテレビがあんねん。お母さん、気づいて録画しといてくれへんかなー」
どうにも能天気な悩みだな。
「分かってんのか？　オレたち、閉じ込められたんだぞ」
さっき、隆盛が状況をひと通り説明してくれた。それによれば、綾澤美術館は、丘の南側をゴルフコースのように切り開いた形で横たわっている。そのため、通行できなくなった唯一の道路以外に活路を見出そうにも、三方は深い森また森である。ふだんでも踏破するのは困難なのに、嵐ともなれば命を捨てに行くようなもので、ここで静かに救援を待つのが最善の方法ですと言った。
それを受けてなまみさんは、ご迷惑をかけしますと頭を下げる。
幸いにも、食料は一週間分あるので心配ないとのことだった。そんなに長くお世話にはなりたくないが、綾澤なまみさんと懇親を深められるなら、いつまでだってＯＫだ！
志乃が、夕食の準備を手伝ってくるわと立ち上がった。オレもトイレに行こうと、続いて廊下に出る。
すると、エントランスの方から騒々しい物音と言い合う声が聞こえてきた。
「誰だ？」
「行ってみよっ」

10　追っかけ達

エントランスで隆盛と争っていたのは、見知らぬ三人組だった。
「なまみ様に会わせろ」
「ここにいるのは分かってるんだ」
「ボクたちをナメてると、許さないぞ」
三人の若者はいずれも二十歳前後か。どうやら綾澤なまみの追っかけらしい。しきりに隆盛を挑発するが、ファンの扱いに慣れている彼の壁は、おいそれとは乗り越えられないだろう。
「お帰りください」
「帰れだって？」一人が目を剥く。「外を見ろよ。こんな天気で、どこへ行けって言うんだよ」
街灯に照らされた屋外は、依然として豪雨に煙っている。
さすがに隆盛も返す言葉がない。それでも館内にすんなりと入れるつもりはなく、両腕を広げて立ち塞がっている。
三人とも傘も持たずにここまで歩いてきたらしく、着ているTシャツは泥まみれで、袖や髪の毛から、ポタポタと水しずくを垂らしている。
「あ、そこのお兄さん、助けて」一人がオレに気づいて声をかけてきた。「この分からず屋のおじさんをどけてくださいよ」
と言われても、オレは単なるゲストだ。この場を仕切る資格などあるわけがないし、あってもどうすべきか、判断が難しい。
追っかけの中には、ファン熱が高じ、過激で常軌を逸した行動に出る者が多々いる。そんな連中を、アイドルと同じ屋根の下に置けるものか。何かあったら国家的大問題だ。
隆盛は彼らを、外と内のガラスドアの間に封じ込めようとしている。ひとまずはそれしかあるまい。しかし三人は承知しない。そこはエアコンの勢力外なのだ。雨露はしのげても、一晩過ごすのはつらいだろう。

双方に押し問答の疲れが見え始めた時、
「入れてさしあげなさい」
美しい声がホールに響いて、事務室のドアが開いた。
その瞬間、追っかけ三人組の身体に電流が走った。
「なまみ様」
「なまみ様だ」
それぞれに信奉する相手の名を口にする。
「つい、うたた寝してしまいました」
なまみさんは自分の頬を手の平で張りながら駆け寄ってくる。事務員の服装に興奮したのか、若者の一人が「萌え～」と雄叫びを上げた。
「き、来てはいけません。彼らは、ブラックリストの上位に載っている悪質な者たちです」
うわっ、そんなリストがあるのか。しかも上位だと？　やっぱりヤバい奴らだったんだ。いったい何をやらかしたものやら。
「しかたがありません。非常事態なのですから」そう諭すと、若者たちに向かって「他にもお客様がおられます。静かにしてくださるなら、今夜だけお迎え致します」
「モ、モチロン！　なまみ様の御心の平和と安寧のために、我々は存在するのですから」
よく見ると、三人とも同じTシャツを着ている。胸にはアルファベットでガーディアン・エンジェルズ・オブ・ナマミの文字が。なまみさんの守護天使か。きっと彼女を守れるのは自分たちだけと信じて疑わないのだ。
「では隆さん、空いているお部屋にご案内して」
方針は決まった。三人は勝ち誇ったように濡れた靴を鳴らしながら、堂々とロビーに入ってきた。
隆盛は歯噛みするしかない。こちらへどうぞと、彼らを廊下の先に誘導していく。三人がなまみさんに近づかないよう、鬼のように監視しながら。

「アレッ？」
若者の一人が子供じみた声を上げた。視線の先には、ちょうど加東が応接室から出てきたところだった。
「アンタはさっきの車にいた奴じゃないのか」
若者がそう言って指さすと、隣りの若者も、
「そうだ、コイツだ！　ボクたちに見向きもせず、泥水を跳ね上げて走り去ったんだ！」
いきなりコイツ呼ばわりされた加東は、ぽかんと見返すばかりだったが、一拍置いてアァと首を振り、
「ワケの分からない言葉を喚いていた人たちだね。あれは君たちだったのかい」
「ヒドいじゃないか！　土砂降りの中で、必死に助けを求めてたのに」
「助ける？　どうやって」
「どうやってって——乗せてくれれば良かったんだ」
「乗せる？　君たちを？」突然、加東はハハハと笑い出した。「そりゃ無理だよ。だって、車内が汚れるじゃないか」
若者たちが言葉を詰まらせるのが分かった。後をついてきたオレもびっくりした。本気で言ってるのか、このキュレーターは。
加東は話は済んだとばかり、くるりと背中を向けて歩き去ろうとする。ところが若者たちの憤りは治まらない。
「待てよ！」
叫ぶと、訓練されたかのように一斉に床を蹴った。
危うし、加東！
ところが間一髪、彼らは隆盛の長く太い腕によって取り押さえられた。さすがは有能マネージャー。
と褒めたのも束の間、一人だけ輪になった腕を抜け出し、立ち去る加東を追おうとした。オレだって、ただ見物してるわけにはいかない。彼にタックルするべく飛びかかった。しかし腕を振られてあっさり壁際に転がされ、後頭部を打った。今日は二度目だ。

うわっと悲鳴が聞こえた。加東じゃない。薄目を開くと、オレを振り切ったはずの若者が床に伸びていた。
「イェ～イ」
志乃だ。彼女が足でひっかけて転ばしたのだ。
やるなぁ。
隆盛が駆け寄り、最後の一人も御用となった。
加東はそんな騒動もなかったかのごとく、悠然と廊下の先のトイレに消えていった。

《第2部につづく》